

鴨川シーワールド海獣医師

勝俣悦子

Etsuko Katsumata

海獣と共に生きて

イルカやシャチ、アシカなどの海獣のショーや展示で親しまれている千葉県
鴨川シーワールド。そこで活躍中の海獣医師（海獣を専門とする獣医師）が勝
俣悦子氏である。子供のころから動物と水泳が好きで、両方の「好き」を活か
せる職場として鴨川シーワールドを選び、最初は飼育員からスタートした。動
物たちを水中から観察し、一つ一つ現場で学んだという勝俣氏。海獣たちと共
に生きる喜びや、水族館の果たす役割などについてお話を伺った。



一度は諦めた海獣医師への道

——まず、先生が海獣医師への道を選ばれた経緯についてお聞かせください。

勝俣 子供のころから動物好きで、家でリスや犬を飼っていました。水泳も大好き。東京オリピックで日本水泳陣が惨敗し、ジュニア強化が叫ばれていた時期にできたスイミングクラブに通って、熱心に練習していたんです。大学進学ではずいぶん迷いましたが、獣医学科であれば水泳を続けることもできるけれど、体育系大学で獣医師の免許を取るのは無理、ということので、獣医学科を選びました。

でも、街の獣医さんとして小動物の診療をするということとは全く頭の中になかったのです。

学生時代は勉強よりも馬術部で馬の世話に明け暮れていました。卒業する時期に、イルカの能力に注目した記事が雑誌などに載り始めたんです。エコーロケー

ション(注)で真っ暗な中でも物が認識できるとか書いてあって、イルカがいいなと思うようになりました。周りからは「イルカをやりたいと言っても、一〇年はかかるよ」なんて言われまして、私は「一〇年かかったって、人のやっていないことをやるのは面白いじゃないか」と思っていました。

(注) 反響定位。動物が音や超音波を発し、その反響によって物体の距離・方向・大きさなどを知ること。

——当時、イルカのショーをやっている水族館は既にあつたのでしょ

うか？

勝俣 例えば、老舗の江の島水族館（現新江ノ島水族館）のオープンが今から約六〇年前、鴨川シーワールドは四二年前です。私が大学生のころ、新宿駅にイルカがジャンプした写真の載った鴨川シーワールドのポスターが貼ってあって、目がくぎ付けになり、ある日、大学に行くふりをして鴨川シーワールドに一人で出掛けて行きました。

その時、意見を書く紙があつたので、「獣医の卵です。イルカの能力について知りたい。イルカの実習をさせていただけるといい性がありますか？」と書いて出したら、飼育課長さんから「実習できますよ」という手紙をいただきました。実際に実習させていただと、イルカは本当に凄いなと思ひ、イルカをますます

好きになりました。でも同時に、私が獣医としてイルカを相手にするのはとても無理だと思ひました。

——なぜ、そう思ったのですか。

勝俣 大学では馬術部で馬の話ばかりでしたし、そもそもイルカのことを教えてくれる授業などないので。実習が終わった時に、「自分の能力では無理」とお手紙を出しました。卒業後は水泳の指導員を一年間やりました。その時に、鴨川シーワールドに日本で最初のベルーガ（シロイルカ）がやって来たこと知り、観に行きました。その時に、やっぱり自分がやりたいのはこれだと気付きました。園内を歩いていたら、たまたま飼育課長さんに再会し、「まだ席が空いてるよ」と言われ、飼育係として入れていただくことになったのです。

取材・文 千葉葉望
写真 谷山實

動物の生態を理解した健康管理が大切

——実際に海獣に接してみても、いかがでしたか。

勝俣 最初はベルーガの飼育とシヨウを担当しました。朝は餌の準備から始まり、水中シヨウをやつて、餌の片付けもして、と飼育作業をすべてやりました。実際に飼育してみないと分からないことがたくさんありました。三年間、ベルーガと一緒に水中に入り、彼らの世界に加わったことは、大変貴重な経験でした。ベルーガの担当を外れてからは、獣医としていろいろな海獣に接するようになりましたが、手探りの毎日でした。

少しずつ勉強が進み、例えば、採血検査の腕も上がって、「この数値だから肝臓が悪いんだ」とか「腎臓が悪いんだ」というようなことが、分かるようになっていきました。熱がある時にイルカはどのような行動を取るかということも分かってくるので、熱が出ているからどこかにばい菌が入ったな、と

いった診断ができるようになり、基本的にはイルカは嬉しくても悲しくても、どこか痛いところがあっても泳いでいるだけなんです。だから私たちが凄く五感を使ってくみ取らなくてはいけない。もちろんデータも大切ですが、感覚的な部分がとても重要です。——種類ごと、あるいは個体ごとに性格や行動も違うのですか。



勝俣 違いますね。「海獣」とひとくくりにしていますが、イルカの仲間は完全水中生活者ですし、アシカやアザラシは陸上でも暮らします。種類が違えば生態も違います。アシカはおなかが痛いとか鰭形の前足でおなかを抱える格好をします。人間と同じですね。そうした行動の変化が目安となります。

現場での経験を通じていろいろと勉強していく中で、海獣はそれぞれ異なる生態を持っているので、それに合った扱いをしなくてはいけないということを強く意識するようになりました。基本的な知識は専門書で勉強できても、具体的な生態への認識不足が一つでもあれば動物はあつという間に体調を崩します。例えば飼育水温をちょっと間違えただけでも……。そうしたことをしっかりやってあげた上で、初めて人間と海獣との交流が生まれるわけです。

——まだご経験が浅かったころには失敗もあったのでしょうか。
勝俣 私が入社五、六年目ぐらいの時に雄と雌のセイウチの子供が



入って来たんです。とてもかわいくて、彼らとよくじゃれ合っていて、遊びました。そうすることで人によく懐くことが分かりました。

ただ、セイウチの飼育には二つ問題がありました。一つは食べていけないものであっても、食べてしまうこと。消化できないものがおなかに詰まると腸閉塞を起こしてしまうんです。もう一つは



かつまた・えつこ ● 1953年東京都生まれ。獣医学博士。日本獣医畜産大学（現日本獣医生命科学大学）獣医学科卒業後、1977年に千葉県鴨川市の水族館、鴨川シーワールドに入社。ベルーガ（シロイルカ）の飼育担当を経て、シャチやイルカなど海獣類の健康管理に従事して現在に至る。2003年にバンドウイルカの人工授精に日本で初めて成功し、日本動物園水族館協会の古賀賞受賞。2005年に「飼育海生哺乳類の繁殖に関する研究」で獣医学博士号を取得。著書に『わたしはイルカのお医者さん』（岩波書店）、『わたしは海獣のお医者さん』（岩崎書店）がある。

牙が生え始めるとそこが痒いので、壁にこすり付けて削ったりすること。削るとそこから虫歯になって膿がたまってしまう。私の経験が浅かったころは雌のムックに両方を経験させてしまいました。命を守るために牙を抜くことになった時、アメリカの水族館に問い合わせた時、方法を教えてもらい、麻酔をかけ、当時の館長がノミとトンカチを使って牙を摘出しました。

——ムックが先生を信頼していたからうまくいったのでは？

勝俣 ムックは私のことをお母さんと思っていたようですね。

ムックは私の後を追って来るので手術のための移動もスムーズにできました。病気を克服した後、ムックは子供を産み、子育ての様子も見せてくれた。セイウチのお母さんはとても愛情深く、前足でだっこしてあげたり、おんぶしたり口から水をぴゅーっと飛ばして子供をあやしたりするのです。

——海獣はもともと人に懐く性質があるのでしょうか。

勝俣 ありますね。特にイルカの仲間もよく懐きます。野生のイルカをプールに搬入すると大海が怖いので、壁から離れて泳ぐ

ですね。そこで餌を投げ与える位置を少しずつ壁に近付けていくと、だんだん慣れてきて近付けるようになります。壁を怖がらなくなれば少しずつ体も触らせてくれます。イルカは人間に害を与えるのではなく、友達になろうとする不思議な動物です。状況を受け入れ、一緒にやっついこうとする

イルカのスリムに学んだ子育ての工夫

——海獣たちの治療を行ってき

て特に思い出に残っていることは。

勝俣 トドのノサが餌を食べなくなつた時のことです。具合が悪くても普段与えていない活魚を与えることと喜んで食べるものから、生きた魚をもらってきて与えてみました。ところがその魚をグツチャグツチャとかみつぶして遊ぶだけでなかなか食べない。でも最後にしっぽの部分だけ食いちぎって、ぐいっと飲み込んだんです。もう一匹与えてみても同じことをするので、「これだ！」と思って、かみつぶされない部位を観察し、しっぽの部分

能力があるのかも知れません。本来は海にいる動物を飼っているのですから、彼らが幸せに生活できるように努力するのが私たち動物を飼育する者の役割だということ、忘れてはならない。動物に対していいかげんなことは、絶対にやっついけなないと思っています。

に薬を仕込んで与えたら、ちゃんと飲み込んでくれました。動物を治療するにはうまく投

薬することが非常に重要です。動物園の動物なら麻酔銃で眠らせておいて検査ができますが、水中にいる海獣類は麻酔で眠ってしまえば息ができなくなつたりするのでそれも難しい。ですから飲み薬を与えて、まず症状を和らげ、体調を好転させることがとても大切なことです。そのために、よく海獣を観察し、解決策を見つけていく。それはクイズを解くようなもので、とても面白いですね。でも、一頭の動物でうまくいったからといって、別の動物にも応用で



雇も開く INTERVIEW

きるとは限らない。現場は理論では割り切れないんです。机で学ぶ勉強ができればいい飼育ができるというわけではない。現場で学び、応用しなくてははいけません。動物との知恵比べがこの仕事の醍醐味だいごみですね。

——先生と飼育員の方々との関係も大切ですね。

勝俣 飼育員は飼育をしながらトレーニングやショーも担当し、私が健康管理を担当する仕組みになっています。飼育に根差してショーをやっているのです、海獣たちの体調が悪い時にはまず親代わりの飼育員が気付きます。そこで私が一緒に診て、治療方法を考えていきます。といっても、私たちには、動物自身が持っている治

癒力を補うことくらいしかできません。ですから、普段から病気になるような体力づくりや、良い環境づくりなどに重きを置いています。ショーに出ているイルカがやせていると思えば、餌をカロリーの高い魚に変えるとか、ビタミン剤を添加するなど、栄養状態を整えます。繁殖の成功においても栄養管理が非常に大切なんです。

——先生自身も二人のお子さんのお母さんですね。

勝俣 私自身の出産や子育てにも、動物たちから学んだことが役に立っています。鴨川シーワールドのオープン当初からいるイルカのスリムは一〇回も子供を産んだ先輩お母さん。イルカたちの子育ては保育園に子供を預けるように、お母さんイルカと出産経験のあるイルカが共同で子育てをします。

私は仕事をしながらの子育てで、現場は結構忙しいですし、最も忙しい土日の休みはなかなか取れない。夫も同じ職場で働いていますので、夫との交替制も難しい。ですから保育園と保育ママ、

学童保育と両方のおじいちゃん、おばあちゃん、みんなに手伝ってもらいました。うちの子たちはスリムたちが共同で子育てしているのと同じように、皆に育ててもらいました。

——お子さんたちも動物がお好きですか？

勝俣 獣医の仕事は嫌だと言つて、別の分野に行つてしまいました(笑)。具合の悪くなった動物を診るのはつらいと思つてしまったのかもしれませんが、動物自体は大好きで、大学生活で家を出た今でも家に帰つて来るのは、親ではなく飼犬に会いたいからなのでしょう。

——本来は自然の中で生きるはずの海獣を水族館で飼う意味について教えてください。

勝俣 水族館や動物園の役割は四つあります。一つはレクリエーション。二つ目は種の保存。三つ目は教育、四つ目が調査・研究です。私たちもそうした線に沿って活動しています。特に私は女性としての目線から繁殖に関する研究に取り組んできました。私どもは、セイウチの繁殖については、

世界でもトップクラスだと自負しています。ただ、唯一ベルガの繁殖がうまくいっていないんですよ。基本的な調査は終えて、数年前からアメリカの水族館と共同で人工授精を試みているのですが、まだ成功していません。今後、何とかベルガの赤ちゃんを見たいと思っています。

——最後に、一度はあきらめかけた海獣医師への道をしっかりと歩んでこられた先生から、夢に向かって頑張る人々にエールをお願いします。

勝俣 すべての夢を実現できるとは限らないと思うので、安易に「夢に向かって頑張れ」と言ってしまうっていいのかわからない気持ちはあります。ただ、私の場合は、幸運にも巡り合ったチャンスを活かして自分の好きなことをやることができました。チャンスは逃さないことが大事、また、好きなことに向き合っていればどんな苦労も乗り越えられる、ということが私の感じていることです。

——たくさん興味深いお話をありがとうございました。

(インタビュール情報サービス局長 鮎瀬典夫)